

令和5年度8020公募研究事業
研究報告書抄録（採択番号 23-4-08）

研究課題：姿勢と嚥下機能に着目した口腔機能低下症の予防法の検討

Prevention of Oral Dysfunction by Focusing on Posture and Swallowing Function

研究者名：内田学¹⁾ 山口育子¹⁾ 川井健太郎¹⁾ 宮地司¹⁾ 鬼木隆行²⁾ 新明桃²⁾
小林利彰²⁾ 野原佳織²⁾ 関根千佳²⁾ 生井登志子²⁾ 久保田好美²⁾

所属：1) 東京医療学院大学保健医療学部リハビリテーション学科
2) ライオン歯科衛生研究所

【研究の背景】 高齢者に対して、口腔機能の維持・改善を促す啓発は 8020 運動を代表として社会的にも認知されており、大きな成果をもたらしている。一方で、口腔機能が改善できているにも関わらず誤嚥性肺炎などの発症リスクは抑制されていない現状がある。口腔機能とは別の要因が関与していることが推察されており、退行変性を経る成人期からの退行性変化について調査する必要性を感じている。本研究では、成人期における嚥下機能に影響を及ぼす要因の関連について、口腔機能に身体機能を指標として加え、嚥下に制限をきたす要因を明確にすることを目的とした。

【方法】 対象は、40 歳から 60 歳までの健常成人 31 名（男性 14 名、女性 17 名）とした。身体機能としては、①体格指数（BMI）、②長座位体前屈、③腸腰筋筋力、④円背指数、⑤多裂筋筋厚（超音波画像診断装置）、⑥立位バランス（Functional reach test）、⑦握力とした。嚥下機能検査は、①顎関節開口量 ②反復唾液嚥下試験 ③舌圧測定 ④相対的喉頭位置とした。統計的手法として、身体運動機能と嚥下機能の関連性を調査する為に、嚥下機能の代表的な指標である RSST と身体運動機能身体運動機能の 7 項目（BMI、長座位体前屈、腸腰筋筋力、円背指数、多裂筋筋厚、FRT、握力）、嚥下機能検査 3 項目（顎関節開口量、舌圧測定、相対的喉頭位置）の相関分析として Pearson の相関分析を用いて検討を行った。

【結果】 相関分析の結果として、RSST と相関を認めた項目は、長座位体前屈 ($r=0.450, p<0.01$)、円背指数 ($r=0.546, p<0.01$)、相対的喉頭位置 ($r=0.552, p<0.01$) の 3 項目であった。

【考察】 高齢者における嚥下筋機能障害に対する直接的な介入は大きな意味があり、ガイドラインに明記されるなど診療の中では必須の介入になっている。しかし、高齢者よりも低い世代の対象者などに対しては、嚥下機能に対する直接的な介入の前に、身体機能評価に基づく姿勢などの評価、介入が重要視されなければならないものと考えている。この世代は、加齢の影響を受ける事で更に姿勢の変容が生じ、嚥下機能に対する負荷が加わる事で直接的な嚥下筋機能障害の加速に繋がる事も予想される。40 歳から 60 歳の対象者に対して、口腔機能だけに特化した評価を実施するのではなく、身体運動機能と姿勢の関連性も視野に入れた評価なども含めて総合的に判断する必要性が示された。